

二〇一九年度・学力考查問題【国語】

(中学帰国生)

注 意

- 一、試験時間は2科目合わせて80分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は9ページでⅠ・Ⅱ・Ⅲの三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に数えます。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

存在感のうすい「尾垣真」と、こだわりが強く他者と対立しがちな「城田珠美」は、クラスで浮いています。二人は、推薦入試ですでに高校進学が決まっているという点でも共通し、おたがいに意識しはじめています。

ある日、「城田」がクラスメイトの「尾佐」と「江元栞奈」との争いの中で左目に怪我を負わされるといふ事件が起き、それを知った「真」は、お見舞いに行こうと思いい立ちます。しかし、「城田」の自宅前まで行ったものの勇気が出ず、「真」はそのまま引き返してきてしまいます。

翌日、城田は学校に来なかった。

それは不思議なことじゃない。だが、江元と尾佐が何事もなかったように登校していて、取り巻きや仲間どもいつものように笑ったりしゃべったりふざけあつたりしているのは、不思議というより不条理だった。

あいつら、何のお咎めもないのか。昨日の出来事を、先生たちはどういう形で処理しようとしているのか。

一人で、それも内心で息巻いているだけでは誰にも伝わらない。現実には毛ほどの影響ももたらさない。ざりとて、真が尾佐に喧嘩を売って勝てる見込みはまったたくなく、江元に何か言ったところで言い負か

されるのがオチだ。江元栞奈は屁理屈と自分に都合のいい言い抜けが上手い。

そしてみんなに笑われる。へえ、尾垣は城田とカップルだったのか。ちようどいいや、あの二人なら。

真がこんなに悔しいのだ。城田は、あいつは今、どんな気持ちでいるのだろうか。

慣れているから、こんなことぐらい平気だよ。あの表情の乏しい顔で、平坦な口調で、千切って投げるみたいに言うのだろうか。

やっぱり、城田に会おう。城田がどう思うかなんてどうでもいい。どう思われてもいい。尾垣君には関係ないと言われてもいい。

真は会いたい。会って、僕は腹が立っていると伝えたい。城田さんがこんな目に遭わされて、江元と尾佐がケロッとしているのが許せない。こんなこと、許されちゃいけないんだと伝えたい。

何より、まず城田に謝りたい。

ちゃんと自宅を訪ねようか、いきなりじゃ何だから、またあの親切な今事務局長を頼ろうかと考えて、真は自分がとんでもないバカだと気がついた。

思わず、「あ！」と、声を出してしまった。英語の授業中で、教室には前島先生が立っていた。過去問の答え合わせをしている最中だ。

「尾垣、どうした」

クラスメイトたちのあいだから、忍び笑いが漏れた。

「おまえにはもう用のない授業だろうが、これから試験を受けるみんなには大事なんだ。静かにしてる」

「すみませんでした」

寝ぼけてンじゃねえよと、真の後ろで誰かが言った。いいねえ、^{※3}安パイを選んで受験を済ませちゃったヒトは。

じっとしていると、今にも立ち上がって駆け出してしまいうさうだった。真は強く口を結んで堪えた。

確実に城田に会いたいなら、あいつとちゃんと話したいのなら、行くべき場所は自宅なんかじゃない。そんなのわかりきってるじゃないか。

^{※4}城址公園だ。あいつは必ずそこにいる。あの殺風景な眺めを、スケッチブックに描いている。

城田は今日も、黒いダウンジャケットに赤いニット帽をかぶっていた。ベンチに座り、膝の上にスケッチブックを広げている。

真が近づいていっても、城田は木炭を動かさず手を休めなかった。スケッチはほぼ仕上がっているように、真の目には見えた。

「出来上がったの？」
声をかけると、木炭が止まった。

真はベンチの脇に立った。テレビの天気予報で見た西高東低の天気図のとおり、城址公園の広場の上には青空が広がっている。

口を開くと、風が歯に染みるほど冷たかった。

城田は左目に眼帯を付けていた。子供用のマスクほどの大きさの眼帯で、頬の半ばまで覆っている。顔のほかの部分には目立った傷や痕跡はなく、それに安堵するのが半分、眼帯の下がどうなっているの心配なのが半分。

「もう完成してただけど」

³いつもの城田の声だった。顔を上げ、雑木林に目を向けている。

「眼帯をして見ると感じが違うだろうと思つて」

「違つてた？」

⁴「うん。面白いから手直ししてた」

とことん、絵描きの台詞だ。真の心のメーターの針が、安堵の方へちよつと揺れた。

しかし、スケッチはやつぱり荒涼としていて、現実のこの場所よりも寒そうだった。この前見たときより、もつと寒そうだった。

今の城田の心の温度だ、と思つた。

「怪我、ひどかった」

城田は答えない。真も、わざと質問に聞こえないようなトーンで訊いた。

「ちよつとずれてくれる？ ボクも座つて、城田さんの目の高さでこの景色を見てみたいんだけど」

⁵城田は黙つたままひよいと右に寄つた。空いたスペースに、真も黙つて座つた。

北風が吹き抜けてゆく。二人つきりで、広場には誰もいない。

「ボクにも、こうやって見ることはできるんだけどさ」

真も雑木林を見つめたまま、言つた。

「見たものを描くことはできないんだ。きつと、目と手のあいだがつながつてないんだね」

雑木林が騒ぐ。北風が強い。

「——よく、そういう方をするけど」

城田の声はくぐもつていた。あまり口元を動かさないようにしゃ

べっている。

「ものを見るのも、見たものを絵に描くのも、みんな頭がやってることだよ」

そっか、と真は言った。

城田はスケッチブックをたたんだ。そうして近くで見ると、表紙が手擦れしていた。城田は何度も、何度も、このスケッチブックと木炭をお供に出かけて、目に映るものを描いてきたんだ。

いつも一人で。

几帳面な手つきで、木炭も筆箱に戻す。足元に置いたよれよれのビニールバッグに、スケッチブックと一緒にしまいこんだ。今日は学生靴ではない。学校には行かず、家から直接ここに来て、ずっといたんだろう。何時からいたんだろうか。

道具を片付けてしまっても、城田はベンチから立ち上がらない。両手を膝に置いて、また雑木林を眺めている。

「頭のなかで暮らせたらいいのにね」

眩くようにそう言った。

「外に出ないで、ずっと自分の頭のなかにいられたら楽なのに」

でも、そこは寒いぞ——と真は思った。おまえの頭のなかは寒すぎで、木炭を握る手が凍りついちゃうぞ。

「城田さんがそうやって描く絵も見てみたいけど」

言いかけて、真の喉が詰まった。乾燥した風のせいだ。そうに決まってる。目がしばしばするの、風が目に入ったからだ。

6 そんなこと言うなよ、と言った。自分ではそのつもりだったけれど、実際に出てきた声は濁点まじりで、そんなこといぐなよと聞こえた。

城田が笑った。口元というより、頬を動かさないようにしている。だから笑い声もくぐもっていて、短かった。

そして真に目を向けた。眼帯をしていない右目が、ちよつと細くなっている。

「尾垣君って、今時の男子だったんだね」

真は城田の右目を覗き込む。「な、何で」

「すぐ泣く。女の子みたいに」

また笑う。真は手の甲で顔を擦った。

「泣いてなんかないよ」

(宮部みゆき『過ぎ去りし王国の城』新潮社より)

※1 不条理：ことからの筋道が通らないこと。

※2 今事務局長：城田家が経営する病院の事務局長。先日、真が城田のお見舞いに行こうとした時に親切に対応してくれた。

※3 安全パイ：ここでは確実に合格する進学先のこと。

※4 城址公園：かつて城があった土地を整備して作られた公園。「真」は以前に、城址公園から眺めた町の様子をスケッチする「城田」と会い、話したことがある。

※5 木炭：スケッチをする際、細くてやわらかな線を描くために用いられる美術道具。

※6 西高東低：冬型の気圧配置を表す略語。

問一 —— 線 a 「息巻いている」・ b 「さりとして」とありますが、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 息巻いている

- ア 深く呼吸をして決心する
- イ ため息をのみこんで悩む
- ウ 息づかいを激しくして怒る
- エ 呼吸ができないほど動揺する

b さりとして

- ア おそらく
- イ したがって
- ウ それだからこそ
- エ そうであっても

問二 —— 線 1 「やっぱり、城田に会おう」とありますが、次の選

択肢の中にこの時の「真」の気持ちを説明したものが三つあります。その組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- a クラスメイトになめられたくない。
- b 江元と尾佐が許せない。
- c 城田にどう思われても関係ない。
- d 城田を傷つけたことが悔しい。
- e 城田に会う方法が思いつかない。
- f どうしても城田に謝罪したい。

問三 —— 線 2 「もう完成してただけど」・ 3 「眼帯をして」

- ア b、d、e
- イ a、b、f
- ウ b、c、f
- エ c、d、e

だろうとあって」・ 4 「面白いから手直してた」のように話す「城田」に対して、「真」はどのように感じていますか。その気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ぶっきらぼうな話し方と、視界の変化を絵画に活かそうとしている様子に、城田らしさを感じて安心している。
- イ 不機嫌そうな受け答えと、怪我をしてもなお絵を描き続ける様子に、城田の新たな一面を見出して驚いている。
- ウ ゆっくりとした口調と、怪我を感じさせない元気な様子に、城田の気づかいを感じ取って悲しくなっている。
- エ 感情のこもっていない言葉と、絵に集中している様子に、城田の苦悩の大きさを知ってうろたえている。

問四 —— 線5 「城田は黙^{もく}ったままひよいと右に寄った」とありますが、この時の「城田」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 理解しようとしてくれる真を、いやいや受け入れようとしている様子。

イ 寄り添^そおうとしてくれてる真に、素直^{すなお}に心を開こうとしている様子。

ウ 怪我の心配をしてきている真に、元気であると伝えようとしている様子。

エ 友達になろうとしてくれてる真を、拒絶しようとしている様子。

問五 —— 線6 「そんなこと言うなよ」とありますが、この時の「真」

の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分を責めている城田の様子に、戸惑^{とまど}いや悔^{くや}しさを覚えてる。

イ 孤独を選ぶとする城田の様子に、さびしさややりきれなさを覚えている。

ウ 独りでいようとする城田の様子に、あきらめやうつとうしさを覚えている。

エ 仕返しを考えている城田の様子に、怒りや悲しみを覚えてる。

問六 —— 線7 「眼帯をしていない（）細くなっている」とありますが、この時の「城田」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の孤独な状況をからかうような真のふざけた発音を耳にして、共感してくれないことに怒りを覚え、するどい目つきでにらんでいる。

イ 自分の抱えるさびしさに共感しつつも泣きながら非難してくれる真の姿を見て、悲しい気分がなくなり、本来の笑顔を取り戻している。

ウ 自分の抱えるさびしさや孤独をやさしく包みこんでくれる真の意外な姿に、女性的な一面を感じとり、認識を改めようとして見ている。

エ 自分の孤独な状況を心配するあまり泣き出してしまった真の姿を見て、かたくなな気持ちが変わらぎ、よりうちとけてきている。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

われわれの歴史は、自然を社会化してきた歴史ともいえる。少し表現をかえるならば、これまでわれわれは生活のなかに自然を取り込んできた。自然を社会化することは大きく二つにわけることができる。

第一に、労働による自然の社会化である。われわれは動物を狩り、魚を捕り、木の実を拾う営み、すなわち漁労も含めて狩猟採集を行ってきた。そして、種を植え、**I** 苗を植え、作物を収穫する農耕、そして家畜を飼育する牧畜も行ってきた。この農耕牧畜において、われわれは労働を通して自然を人間の社会に取り込みはじめた。すなわち、労働による自然の社会化をはじめたのである。

その一方で、われわれの自然の見方をきいて、文化による自然の社会化を見逃すわけにはいかない。いにしえからわれわれは星空を眺めてきた。そして、星と星をつなげ、星のまとまりを星座と呼び、その星のまとまりから神話の世界などを想像していた。不思議なもので、われわれは一度その星のまとまりを秩序ある星座と捉え、**II** ばらばらな星の無秩序なまとまりとは見えなくなる。冬空に三つの一直線に並んだ星を見るとオリオン座だと即座に反応する人も少なくないのでないか。このようにわれわれはあるフィルターを通して、自然を眺めている。これをさしあたり文化と呼ぼう。

文化を通して自然を見ることをもう少しみておこう。一方で、ある文化は牛を見て家畜だと捉えるが、他方で、ある文化では牛は聖獣であると捉える。文化によって自然がどのように捉えられるかが異なる。

したがって、それぞれの文化によって自然をどう捉えるか、もつとえば、文化のなかで自然がどう位置づくかが違うのである。それもそのはずで、それぞれの文化は、その土地の風土と切り離すことができない。さまざまな風土のなかで生活していくことを通じて文化がけいせいされた。たとえば、日本であれば日本の風土における四季折々の自然の変化を踏まえて歳時記が育まれていった。つまりさまざまな自然条件を取り込むことで文化が育まれていった。これが、第二の文化による自然の社会化である。

さて、ここまで論じてきたように、自然の社会化は労働による自然の社会化と文化による自然の社会化と大きく二つにわけることができる。そして、この両者はそれぞれ別々の側面を備えながらも深い関係がある。たとえば、歳時記は〈農〉なしには生まれなかつただろうし、歳時記なしには〈農〉は不可能だつただろう。カプトムシの話に戻れば、カプトムシを商品として捉えるようになったことは、自然の社会化の視点が欠かせない。文化による自然の社会化から言えば、われわれはカプトムシをいつしか里の昆虫ではなく、売り買いする商品として捉えるようになった。そして、労働による自然の社会化から考えれば、われわれが里の生活を手放し、都市の労働を通して自然を社会化していたことの結果であると考えることができる。

では、われわれが里の生活を手放した結果、どのような労働を通じて自然を社会化するようになり、どのような文化によって自然を社会化しているのだろうか。

少々単純化しすぎるかもしれないが、大きく人類史を捉えると以下

のようになる。

そもそもは自然のなかにわれわれがあつたとも言える。狩猟採集においては自然の秩序のなかにわれわれが従つていた。その後、農耕牧畜にうつるなかで、われわれが徐々に自然と距離を取り始める。本章で里の生活という場合、この農耕牧畜の生活を指している。そして産業革命後の化石燃料に依存した都市の生活において人間と自然の関係は一変する。われわれの自由な思考や知的な想像力とやらはあらが、われわれが自然を支配するこ^②うずとなると同時にグロ^{※6}ーバルに社会環境が拡大することと相^あまって人間にとつての環境としての自然が大きく拡大する。身近な自然環境だけでなく、地球の反対側の森や川まで自然環境になる。われわれは普通の生活をしながら、地球の反対側の自然を破壊している。日本で使われている木材の多くは海を渡つてきていることを忘れてはならない。

ここでいう都市の生活というのは、都市と農村に区別する意味での都市の生活ではなく、商品に囲まれた生活を都市の生活と呼ぶ。われわれの生活を眺めてみると、^{※7}このブックレットも商品であり、道路として舗装されたアスファルトも商品であつたし、洋服も商品であり、食べものもそのほとんどがスーパーやコンビニで買った商品である。そして、**Ⅲ 労働力「商品」**としてわれわれ自身が商品となる。商品とはそもそもわれわれにとつては、よそよそしいものである。ここでもカブトムシを例に取るならば、自分で取つてきたカブトムシ、あるいは友達が取つてくれたカブトムシではなく、商品としてのカブトムシは最初から商品として売るために大量にこ^③うりつよく作られた、生産者の側にとつても、購入する消費者の側にとつてもよそよそしいカブトムシである。よそよそしいものである商品に囲まれてわれわれ

は生き、われわれ自身が商品になりながら商品を作り出す労働をしている。したがつて、**Ⅳ 「いなか」**に住んでいても、現代社会における日本に住まうひとびとのほとんどが都市の生活を営んでいるといつてよい。

（大倉茂『環境を守る』とはどういうことか——環境思想入門』岩波書店より）

※1 いにしえ：過ぎ去つた日々、過去のこと。

※2 秩序：望ましい状態を保つための順序やきまり。

※3 歳時記：季節の変化による自然の移り変わりを記した書物のこと。

※4 カブトムシの話に戻れば：筆者は本文より前の部分で自然と人間の関係についてカブトムシを例にあげて論じている。

※5 産業革命：十八世紀後半から十九世紀前半にかけて起きた生産技術の発達による大規模な社会構造の変化。

※6 グローバル：世界規模。

※7 このブックレット：この文章が載っている小型でページ数の少ない本のこと。

問一 線あゝおのひらがなを漢字に直しなさい。

問二 **I** **Ⅳ** に入る言葉として最も適当なものを次の中から

それぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア やつと イ いわゆる ウ もはや
エ あるいは オ なにより

問三

——線1「労働による自然の社会化」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 農耕牧畜によって人間社会の土台ができ、自然が豊かなものになった、ということ。

イ 人間は、生きていくために行う活動によって、自然環境を生活の一部にしてきた、ということ。

ウ 人間は、漁労や採集などによって自然界の中で役割を担うようになっていった、ということ。

エ 自然を支配しようとしている人間は自然の影響を強く受けてきたため、発展がおくれた、ということ。

問四

——線2「文化による自然の社会化」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 地域ごとに異なる生活のしかたが、自然に対してそれぞれに意味づけを行ってきた、ということ。

イ 豊かな人間社会が、自然における事物の見え方を決定してきた、ということ。

ウ 各地域の風土の特色を取り込んだ生活が、自然の一部となった、ということ。

エ 人間が自然を支配するものと考え、生活レベルの向上に必要なものと捉えた、ということ。

問五

——線3「人間と自然の関係は一変する」とありますが、ここで筆者はどのようなことを述べようとしていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文明の発達によって、自然から都市へと生活環境の場が移動したのは当然である、ということ。

イ 人間が自然管理を徹底するため、グローバル化による自然破壊をくいとめるのは当然である、ということ。

ウ 社会環境の拡大にふり回されぬよう、古代に営まれていた自然との共存をめざすべきである、ということ。

エ グローバル化の拡大は都市生活を営むうえで必要だが、それに伴う自然破壊についても自覚すべきである、ということ。

問六

——線4「カプトムシを例に取るならば」とありますが、「カプトムシ」を用いて筆者はどのようなことを述べようとしていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 現代社会では、カプトムシでさえも自然から切り離された商品としてお金のやり取りの対象になってしまっている、ということ。

イ 現代社会では、カプトムシのように人間以外のあらゆるものが商品化され、都市における自然破壊の原因になっている、ということ。

ウ 現代社会では、自然破壊によって自然界のカプトムシがいなくなり、商品としてのカプトムシしか存在しなくなっている、ということ。

エ 現代社会では、都市生活化が進みカプトムシが見られなくなったので、自然界のものを高価な商品として取り扱っている、ということ。

三

言葉の意味や使い方に関する後の問いに答えなさい。

問一 次の言葉の意味として正しいほうをそれぞれ選び、番号で答えなさい。

なさい。

(1) 「情けは人のためならず」

1 人に親切にすると、めぐりめぐって結局は自分のためになる。

2 人に親切にすることは、その人の成長につながらずためにならない。

(2) 「枯れ木も山のにぎわい」

1 つまらないものでもないよりはましであること。

2 参加者が多いほうが楽しくていいこと。

問二 言葉の使い方として正しいほうをそれぞれ選び、番号で答えなさい。

さい。

(1) こんなにたくさんは

1 食べられない。

2 食べれない。

(2) 今日はこれで

1 帰らせてください。

2 帰らせてください。

(3) 彼は足が

1 すこい速い。

2 すこく速い。

国語

解答用紙 (中学帰国生)

受験番号

氏名

得点

一

問一

一

a

b

問二

二

問三

問四

問五

問六

二

問一

一

あ

	きてい
--	-----

い

	けいせい
--	------

う

	うらはら
--	------

え

	こうず
--	-----

お

	こうりつ
--	------

問二 I

II

III

IV



問

一

(1)

(2)

問

二

(1)

(2)

(3)

問

五

問

六

問

三

問

四
